

高島屋史料館 TOKYO

「百貨店展——夢と憧れの建築史」

もっと楽しむ22冊

選書・文

浅子佳英（建築家・編集者）
菊地尊也（建築研究者）

01

『情報の歴史21』

松岡正剛／監修，編集工学研究所

年表といえはこの本を挙げない訳にはいかない。特にそのデザインは秀逸だ。本来であれば1枚の連続した面であるはずの年表を、ページごとに分割される書籍というかたちに落とし込むために小口まで印刷するなど、本を平面としてではなく、立体物としてデザインしている。また、時代ごとにカテゴリーを変化させたり、重要なトピックは文字を大きくすることで、静的な情報の羅列である年表を動的なものにしている。百貨店展では、大いに参考しつつも展覧会という物理空間を活かしてパノラマ的に一望できるデザインとした。[AY]

02

『小林一三 日本が生んだ偉大なる経営イノベーター』

鹿島 茂，中央公論新社

阪急電鉄、宝塚歌劇団、阪急百貨店などの経営で知られる、小林一三の中心にあるコンセプトはなんだったのか。現在の眼から見ても、宝塚や百貨店における新たな顧客＝市民を、男性ではなく女性や子供を中心に置いたことは酔眼だ。ここでも鹿島氏は「我々が小林一三からなにが掴み取れるのか」というアクチュアル

な視点で読み解いていく。それは、一言でいえば「人口が増加する時代になにができるのか」というものだった。逆にいえば現在小林一三が生きていれば、「人口が減少する時代になにができるのか」という視点でコンセプトを練り上げただろう。[AY]

03

『クリエイティブ都市論』

リチャード・フロリダ，ダイヤモンド社

04

『日本近現代建築の歴史』

日笠直彦，講談社

日本の近代建築の研究は多々あるし、現代建築のエッセイはあるものの、実は近代から現代までの関係を描いた日本建築の通史はこれまで描かれてこなかった。本書は、巨大な構築物であるが故に、建築が国家との関係の中で成立していたということを明らかにした上で、日本の現代建築がどこかグダグダで、近代とのつながりが見えないのは、国家との関係が希薄になったからだと看破する。百貨店年表は、その通史からも外れた民間企業による消費者という市民のための建築の歴史である。[AY]

『ミカドの肖像 小学館文庫』

猪瀬直樹, 小学館

なぜ一介の企業であるはずの西武グループのホテルが「プリンス」ホテルと名付けられているのか。それは象徴としてのミカド(天皇)のイメージを、西武グループの堤一族がたくみに利用し、グループを成長させていたからである。猪瀬直樹は丁寧な取材によってこれらの事実を明らかにしていく。その様はまるで事件を解決する探偵か刑事のよう。出版は1986年なのでちょうどバブル経済の真っ只中。1983年には西武百貨店が売上高日本一になっており、そんな最中に書かれたものだと思うと感慨深い。[AY]

『土地の神話 小学館文庫』

猪瀬直樹, 小学館

田園都市線や田園調布に代表される東京の高級住宅地のルーツは、イギリスのエベネザー・ハワードが提唱した田園都市にある。ではそれはどのようなものだったのか。また、それを日本に輸入した際に、いかに換骨奪胎されてしまったのか。ここでも猪瀬直樹は丁寧な取材によって読み解いていく。特に、渋谷駅におけるくだりは強烈だ。現在では下水道へと姿を変えているが、渋谷駅前には今

でも渋谷川が流れている。建築基準法により、本来河川の上に建築は建てることできないが、バスターミナルという公共的な用途であるという理由で五島慶太は押し通し、その後はなし崩し的に駅ビルが建設されていく。現在絶賛工事中の渋谷駅も、この時の五島慶太による辣腕がなければまったく違う姿をしていたかと思うと感慨深い。[AY]

『ゲンロン0 観光客の哲学』

東 浩紀/著・編集, ゲンロン

スマートフォンとSNSによってオンラインではリアルタイムに、格安航空券によって物理的にも、世界中がつながった現在の新たな市民像を描いた必読の書。

小林一三が新たな市民として、ブルジョワジー、その中でも女性と子供を中心に置いたが、東浩紀はここで弱い連帯を可能にする新たな市民として「観光客」に着目する。それは、観光客が旅行者であるが故に、そこに住む住人のようにはその場所に責任を持たず、ある意味ではいい加減な存在でありながらも、数日でもそこで生活をしてしまったら、なにかしらの感情を抱かずにはいられないからである。そしてこの事実の重要性は、現在キーウのような場所に観光で行ったことを想像すれば分かるはずだ。また、哲学書の読み直しと共に、会社を経営した

り、世界中を家族旅行するなど、自身の
実体験をもう一つのベースにしているこ
ともこの本をアクトアルなものにして
いる要因だ。爆買や転売厨など、否定的
に取り上げられることも多いが、観光客
との接点も多い百貨店は、彼らとの新た
な連帯を生み出すことのできる場所でも
あるだろう。[AY]

08

『「パサージュ論」熟読玩味』

鹿島 茂，青土社

ひとつひとつは基本的に平易な文章だが、
引用が多用され、断片的に描かれている
ために、時に難解でとりとめのないウォ
ルター・ベンヤミンの「パサージュ論」を、
自身が蒐集家（コレクター）でもある鹿
島茂氏の手によって丁寧に解きほぐし、
その中心にあるコンセプトを引き出して
いく。興味深いのは、ベンヤミンが機能
性に装飾を被せた19世紀的なものを批
判しつつも、機能のみに収斂していく20
世紀的なものも同時に、いやそれ以上に
批判していることだ。この事実により、
鹿島氏はパサージュ論を、現代に使える
ものとして開いていく
とする。[AY]

09

『ゾラ・セクション 5 ボヌール・デ・ダム百貨店 デパートの誕生』

エミール・ゾラ，藤原書店

物語は、田舎から出てきた貧しい少女
ドゥニーズが苦勞を伴いながらも愛と
成功を同時に手に入れるいわゆるシン
デレラストーリーだが、この本の主人公
はあくまで百貨店だ。

通りすがりの人々を思わず惹きつける
ショーウィンドウ、きらびやかなインテ
リア、開店前の慌ただしい準備の場面か
ら、オープンと同時に建物がまるで動き
出すかのように、百貨店が輝いている様
子がともかくいきいきと描かれている。
百貨店が憧れの場所だったことを伝える
最良のものだろう。その一方で、重要
なのは周辺の商店を飲み込みながら、巨
大化していく様子も描かれていること
だ。今回の年表の中でも明らかなよう
に、百貨店建築は新築時のままで存在す
ることはなく、繰り返し増築が行われ、
絶えず変化していく。[AY]

10

『「民都」大阪対「帝都」東京 講談社学術文庫』

原 武史，講談社

11

『ウィンドウ・ショッピング 映画とポストモダン』

アン・フリードバーグ、松柏社

パサージュから万博、百貨店、ショーウィンドウ、映画、そして現代のショッピングモールまでを同じ議論のテーブルに乗せた博覧強記の視覚文化論。ボードレールやベンヤミンが想定していたパサージュの「遊歩者」があくまでも男性主体のものであり、デパートこそ女性遊歩者にとっての最初の領域であったとする指摘が示唆的。[KT]

12

『モール化する都市と社会 巨大商業施設論』

若林幹夫／著・編集，NTT出版

国内のショッピングセンター、ショッピングモールを主な対象に、その社会的なあり方の変遷を多角的に検証した研究書。交通インフラやコミュニティとの接続、未来学との連動、大阪万博のプランニングからの影響など、百貨店の歴史とも紐づけて考えてみたい論点が多々ある。玉川高島屋SCや戦後の川喜田煉七郎の活動にも言及。[KT]

13

『S, M, L, XL+ 現代都市を めぐるエッセイ ちくま学芸文庫』

レム・コールハース、筑摩書房

有名な巨大マニフェスト本のエッセンスが文庫サイズにぎゅっと圧縮。追加収録の「ジャンクスペース」はハーバード大学院GSDでのリサーチを通じて書かれ、ショッピング空間の過剰流動性をヒップホップ調の文体で体现。なおコールハースは1990年代初頭、梅田の阪神百貨店の土地再開発計画（実現せず）に関わりかけたらしい。[KT]

14

『渋谷上空のロープウェイ 幻の「ひばり号」と「屋上遊園地」の 知られざる歴史』

夫馬信一、柏書房

「百貨店展」のなかでも松屋浅草の展示に興味をもった方々にとくにおすすめしたい。表紙に掲げられた渋谷東横百貨店の「ひばり号」の歴史のほか、都内の屋上遊園地にも触れ、その隆盛から衰退までを総括する。日本橋高島屋関連のトピックとして、屋上で飼育していたゾウの「高子」が屋内の階段を移動する貴重な写真も掲載。[KT]

15

『わが記憶、わが記録』

堤清二×辻井喬オーラルヒストリー』

堤清二／述 御厨貴／編 橋本寿朗／編
鷲田清一／編，中央公論新社

セゾン文化を牽引した経営者兼詩人・堤清二／辻井喬の活動遍歴を辿る聞き取り集。2000年から2001年にかけて、つまりセゾングループが大きな岐路に立たされていた時期の「生の声」を収録。バブル期以降の都市建築論のためにも、あるいは現代におけるオルタナティブな文化の共同体のあり方を考えるためにも必読の一冊。[KT]

16

『装飾をひもとく』

日本橋の建築・再発見』

五十嵐太郎 菅野裕子，青幻舎

日本橋周辺の建築の装飾を分析・考察する試み。細部のひとつひとつに埋め込まれた建築情報を丹念に解凍・展開していく手つきからは、映像やVR技術を用いた建築の新たな話法が模索されている。昨今、それでもなお言葉の力を手放さないことの意地を学べる。続編の『様式とかたちから建築を考える』（平凡社）もあわせて読みたい。[KT]

17

『パサージュ論 1 岩波文庫』

ヴァルター・ベンヤミン，岩波書店

パリのパサージュ研究として書かれた未完の大著。多くの部分が他所の文章の引用からなる。19世紀の遺物であり、建築史においても正統に扱われてこなかったパサージュから、様々な寓意を手繰りよせる。モールのなかを散策するようにちょっと拾い読みするだけでも、今日の消費のモードを考えるための鍵がいくつも見つかる。[KT]

18

『ショッピングモールから考える』

ユートピア・バックヤード・未来都市』

東浩紀 大山 顕，幻冬舎

ショッピングモールを素材に新たな「物語」をつくる野心的試み。敷地と建築の相関についての考察、ウェブサイトの構造の可視化、そして植栽分析など、独自の切り口にもとづく論点が次々と提出されてゆく。均質空間として見なされがちなショッピングモールのローカリティを見出す視点も新鮮。最新型の都市建築批評がここにある。[KT]

19

『三越 誕生！ 帝国のデパートと近代化の夢』

和田博文，筑摩書房

20世紀初頭の「デパートメントストア宣言」とともにいち早く呉服店から百貨店への転身を果たした三越。その創成期の出来事をひもとく。屋内写真や平面図など、当時の空間を迫体験できる図版も豊富。流行創出や児童博覧会による新たな消費者の形成、文学者との関わりといった華やかな営みの背後にあった帝国化の動向にも触れる。[KT]

20

『日本商空間デザイン史1980-2020 インテリアデザインと建築の間に ヒエラルキーがあった時代から』

鈴木紀慶，商店建築社

ヒアリングをベースとした列伝形式のデザイン史。建築の場合、国家や行政をクライアントとする事業計画を下敷きとすることで「わりと大きな物語」に紐づけた近過去の叙述がまだ可能だが、インテリアの場合、同様の構図を採用できる事例は限られている。この縛りのなかで通史を書くことは可能か。著者はその困難な問いに挑む。[KT]

21

『イケアとスウェーデン 福祉国家イメージの文化史』

サーラ・クリストフエション，新評論

イケアといえば、巨大倉庫一体型の消費空間、ダイアグラムの動線、ホスピタリティ精神あふれる仕掛けなどのイメージが強く、公共性をともなう商業空間としても関心を集めている。本書はその発祥の地・スウェーデンとイケアとのある種の「共犯関係」にせまる。私たちが「北欧的なもの」に惹かれる理由の一端もつかめるかも？ [KT]

22

『日本の百貨店史 ー地方、女子店員、高齢化』

谷内正往 加藤 諭，日本経済評論社

「百貨店展」ではわずかししか触れられなかった地方百貨店の歴史を詳しく知りたい方にイチオシの学術書。地方百貨店は1930年代に増加し、東京の支店や地元発祥の百貨店など、その種類は多岐に渡っていたことがわかる。序章では1990年代以降興隆をみた百貨店研究の概要も整理されており、言説の見取り図として活用できる。[KT]

浅子佳英

1972年生まれ。建築家、編集者。2007年タカバンスタジオ設立、2022年には設計と編集を行うPRINT AND BUILDに改組。09年東浩紀らとともにコンテクチュアズ設立、12年退社。おもな作品に「Gray」(2015)、「八戸市新美術館」(2021：西澤徹夫、森純平との共同設計)など。

菊地尊也

1986年生まれ。建築研究者。2022年、東北大学大学院博士後期課程修了。おもな共著に『図面でひもとく名建築』(2016)、『現代建築宣言文集[1960-2020]』(2022)など。研究協力に「インポッシブル・アーキテクチャー」展(2019-2020、埼玉県立近代美術館ほか3館)。

セミナーのご案内

当館セミナーページにて「百貨店展」について語る浅子佳英氏(本展監修)、塚本由晴氏(建築家)の対談をご覧ください。



展示情報

百貨店展——夢と憧れの建築史

2022年9月7日(水)~2023年2月12日(日)

11:00~19:00 入館無料

高島屋史料館TOKYO 4階展示室

東京都中央区日本橋2-4-1日本橋高島屋S.C. 本館

休館 月・火曜(祝日の場合は開館)、年末年始



丸善日本橋店から

高島屋史料館TOKYOへのアクセス

中央通りを挟んで向かいの建物です。

